

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号： 3 2 6 5 3

研究種目： 奨励研究

研究期間： 2021 ~ 2021

課題番号： 2 1 H 0 3 8 6 9

研究課題名 戦時下女子医学生の「学徒医療隊」活動の歴史的研究

研究代表者

油谷（宮寄） 順子（YUTANI, Junko）

東京女子医科大学・その他部局等・学芸員

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 470,000 円

研究成果の概要： 東京女子医学専門学校と 帝国女子医学薬学専門学校の上級生約300人は「学徒医療隊」として集団学童疎開した小学生の元に派遣された。派遣場所は東日本の内 が中央部の7県、 が北・南部の8県であった。大阪女子高等医学専門学校の派遣は、卒業生の証言では行われなかったとみられる。派遣は突然言い渡され、しもやけやひび、擦り傷の手当、盲腸が疑われる児童の開業医への付き添い等を行ったとの証言が得られた。女子医学生の派遣は疎開した学童側の回想録にも確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二次世界大戦期に勤労奉仕した学生は340万人以上といわれる中で、「学徒医療隊」として、主に無医村の疎開学童の診療補助や健康指導に従事したのは、東京女子医学専門学校と帝国女子医学薬学専門学校の女子医学生わずか300名程であった。

疎開学童側からの記録ではあまり記録されていない「学徒医療隊」活動であるが、日本の女性医師の歴史の一面として資料を収集整理し、後世に伝えていかななくてはならない。

研究分野： 歴史

キーワード： 学徒医療隊 学童集団疎開 女子医学専門学校 戦争体験 女性医師 無医村 学徒動員

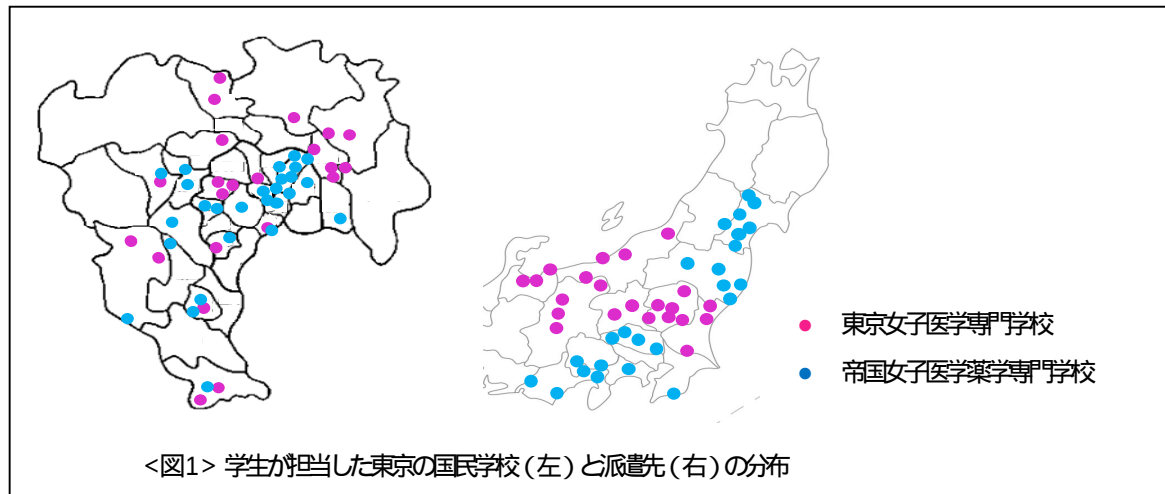
1. 研究の目的

本研究は、1944 年 11 月から 1945 年 2 月にかけて、地方の無医村などに集団学童疎開した小学生の診療補助や健康指導の役割を担って派遣された女子医学専門学校生による「学徒医療隊」活動について、歴史的資料の収集・整理・体系化を目的とした研究である。

公文書、新聞記事、回想録、インタビューなどの「学徒医療隊」に関する資料を資料群として整え、東京女子医科大学内にある展示室での公開、自校教育への活用を目指した。

2. 研究成果

(1) 「学徒医療隊」活動は、東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）と 帝国女子医学薬学専門学校（現東邦大学）の 2 校で、疎開地での冬季対策の一環として、文部省と東京都との協力の下に行われた。関西地区の大阪女子高等医学専門学校（現関西医科大学）では、卒業生の証言や資料からは派遣はなかったと考えられる。と が担当した国民学校と派遣先の分布は<図 1>の通りであり、派遣先はいずれも東日本の内、 は 7 県、 は 8 県で、中央部が、北部と南部が という傾向が見られた。派遣中に教員の見回りがあったことなどから、見回りや連絡上の便宜のためと考えられる。派遣場所などについて、 は『女子医学研究』第 15 巻第 1, 2 号（1945 年 10 月）や資料「東京女子医学専門学校医学徒派遣場所」（『たんぽぽ 東京女子医学専門学校昭和 20 年卒業クラス会文集』2007 年 p246）に、 は「昭和十九年度日誌 教庶務課」（額田記念東邦大学資料室所蔵）に記されている。



(2) 疎開した学童側の記録には「学徒医療隊」活動はあまり描かれていないが、橋本幸雄『ある学童疎開の記』（岩波ブックセンター 1987 年 p126）には、群馬県黒保根村に疎開した王子区の学童の元に女子医学専門学校の学生 2 名が 1 ヶ月弱「疎开学童の検診を国から委託されて」滞在し、内科や眼科の検診や栄養状態の確認、投薬を行った様子が記されている。浅草区清島国民学校の 1944 年 11 月 12 日の学寮訪問者には帝国女子医学専門学校生徒と記されている（佐々木直剛『新版学童疎開下谷浅草の記録』（台東区学童疎開記録刊行会 2009 年 p442）。また、『上毛新聞』（1944 年 11 月 17 日）には、学生としてではなく日本医療団による疎开学童の保健医療活動で群馬県四万温泉地区の診療所を任された女性医師の記録が掲載されており、この女性医師は戦後も長くその地に留まって地域医療に尽くした。1944 年 8 月には、東京都芝区医師会が、栃木県に集団学童疎開した芝区の小学生の元に区内開業の女性医師 4 名を第一陣として派遣しており（『日本女医会雑誌』第 118 号 1944 年 9 月）無医村疎開地の保健医療を女子医学生と女性医師が担っていたことを示す例として注目される。女子医学生たちの活躍は『読売報知』（1944 年 11 月 18 日）『茨城新聞』（1944 年 11 月 24、25 日）などの記事にも見られ、そうした活動に対して、東京都教育庁の 1945 年 11 月の文書「当初二於ケル学寮生活状況」によれば、「無医村常駐医ノ派遣、地元医師ノ囑託並ニ女子医専生徒ノ動員等ニ依リ、医療機構ノ完備ヲ図リタルヲ以テ学童ノ保健状況ハ概ネ良好ナリキ」との評価がなされていた。

(3) 1944 年 11 月と 1945 年 1 月の 2 回、栃木県足利郡三和村に疎開した麻布区筈国民学校の児童の元に派遣された東京女子医学専門学校学生卒業生にインタビューすることができた。派遣は 11 月に突然知らされたものであり、担当学校に挨拶に行った後にすぐに級友と二人だけで三和村に向かった。担当場所では大きな怪我や病気の子どもはおらず、しもやけやひび、擦り傷の手当、盲腸が疑われる児童の開業医への付き添いなどを行った。子どもたちは女子学生を「お姉さん先生」として歓迎した。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京女子医科大学吉岡彌生記念室にてパネル展示とリーフレット等で紹介。

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------